



**④大橋 訥庵 (おおはし とつあん)**  
江戸末期の儒学者。熱烈な尊攘思想家。名は正順 (まさより)、字 (あさな) は周道、通称順藏。兵学者清水赤城 (せきじょう) の四男として文化13年 (1816) 江戸に生まれ、日本橋の豪商大橋淡雅 (たなが) の婿養子となる。佐藤一斎に儒学を学び、思誠塾を開いて子弟を教授、詩文に優れた。安政4年 (1857) 『關邪小言 (へきじゃしょうげん)』を著して尊王攘夷論を鼓吹した。安政の大獄に刑死した頼三樹三郎 (らいみきさぶろう) の遺体を取めて小塚原回院 (えこういん) に埋葬。公武合体論による皇女和宮の降嫁反対運動にも参加した。坂下門外の変に際し、計画の中心人物とされ、老中安藤信正襲撃まに捕らえられたが病のため出獄、宇都宮藩に預けられ文久2年 (1819) 7月12日没した。47歳。



**③西堀酒造**  
滋賀県東近江に居を構える西堀家の10代目当主「源治郎」が、栃木県小山市の日光街道より湧き出す天然水と豊かな水田に魅せられ、江戸時代幕末から明治維新の激動期に間もない明治5年 (1872) に今の酒蔵を譲り受けました。  
小山市南部の日光街道沿いに位置する約3,500坪の敷地内にある蔵のほとんども、創業以前からこの地で、道行く徳川幕府の行列を眺めた遙か昔から現代までの長い歴史を見つめつつ、日本酒を造り続けています。

このあたりから国道は少し右斜めに向かうが、日光道中は直線状に千駄塚村へと通じていた。

**②間々田地区大古墳群の主役**  
国道4号沿いの千駄塚地区を西へ約100m入った所、こんもりとした森が千駄塚古墳。「千田塚村西に富士浅間の塚あり (日光駅程見聞雑記) 山頂に富士山信仰の浅間 (せんげん) 神社を祀り、入口には鳥居がある。別名「浅間山古墳」といわれる。千駄塚古墳群の中心墳ともいえ、北に宮内古墳群、南に牧ノ内古墳群を従え、この3つで間々田地区の一大古墳群を形成している。思川の段丘上に築かれた東日本最大級の大形円墳で、関東有数の大きさを誇る。直径は約70m、高さは約10mを測る二段築成。截頭円錐形 (さいとうえんすいけい) の墳丘を幅15m~20mの周濠がめぐり、とくに西と北側にはっきりと残る。埴輪 (はにわ) ・葺石をともなわず、内部主体が未調査のため築造年代は不詳だが、古墳時代後期とみられる。埴輪には近くの古墳から出土した家形石棺が保存されている。

**徳川家光葬送**  
慶安4年 (1651) 4月20日亡、後光明天皇より法名を「大猷院」と賜る。  
4月21日酉の刻 (午後6時頃) 東叡山寛永寺に安置。  
4月24日卯の刻 (午前6時頃) 寛永寺出棺、春日部最勝院泊、  
4月25日栗橋福聚院泊、  
4月26日間々田龍昌寺泊、  
4月27日鹿沼薬王寺泊、  
4月28日日光山到着



**19 間々田一里塚**  
旧日光街道は現在よりも西側にあったが、すでに消滅している。間々田の一里塚は日本橋から19番目で間々田郵便局前の菓子屋さん「蛸屋」さんのある場所が一里塚跡。



**40 間々田宿 ~ 小山宿**  
栃木県小山市  
間々田宿 ~ 安房神社  
(歩行距離 2172m 28分)  
歩く地図でたどる日光街道  
<http://nikko-kaido.jp/>  
JZE00512@nifty.ne.jp



**①間々田八幡宮 (約647m 8分)**  
間々田宿の鎮守で、天平年間 (729~749) の勧請と伝えられている。境内には松尾芭蕉の句碑「古池や蛙飛びこむ水の音」がある。また、5月5日に行われる「蛇祭り」の中心地。  
939年頃に起きた平将門の乱には、百足退治の伝説で知られる武将・藤原秀郷が、間々田八幡宮ほか治道の神社仏閣に戦勝を祈願し、見事乱を平定した。恩返しとして、神社にご神田を奉納した。以降、八幡宮一帯は、飯田 (まんまだ) の里と呼ばれた。  
鎌倉幕府成立直前の文治5年 (1189) 奥州藤原氏との合戦に臨んだ源頼朝は、先の藤原秀郷の戦勝祈願を知り、自らも八幡宮に参拝し境内に松を植えた。この松は、明治38年 (1905) に枯死するまで「頼朝手植えの松」として、氏子等により大切に守られていた。  
江戸時代に、日光街道が整備されると、この地がちょうど日光と江戸の中間点となることから、地名が飯田 (まんまだ) から間々田 (ままだ) へと改められた。以降、松尾芭蕉も宿泊するなど、日光街道11番目の宿場町として、間々田宿は大変栄えた。また、毎年日光例幣使は、八幡宮が大変由緒あると、道中必ず参拝したという。

**青面金剛**  
日本の民間信仰のなかで独自に発展した尊像である。庚申講の本草として知られ、三尸 (さんし) を押さえる神とされる。道教では、人間の体内には三尸という3種類の悪い虫が棲み人の睡眠中にその人の悪事をすべて天帝に報告に行くという。そのため、三尸が活動するとされる庚申の日 (60日に一度) の夜は、眠ってはならないとされ、庚申の日の夜は人々が集まって、徹夜で過ごすという「庚申待ち」の風習があった。庚申待ちは平安貴族の間に始まり、近世に入っては、近隣の庚申講の人々が集まって夜通し酒宴を行うという風習が民間にも広まった。  
庚申講の本尊である青面金剛の像容は、一面三眼六臂で、手足に蛇が巻き付く姿が一般的で、密教の明王像、特に軍荼利明王に通ずるものがある。日本では各地に石像の庚申塔が多数遣り、そこには「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿像とともに青面金剛像が表されている例が多い。